

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本

個性豊かな

クレヨンたちが 紡ぐ身近な物語

佐々木由美子

ささき ゆみこ／東京未来大学こども心理学部教授。幼稚園教諭を経て、子どもと物語、絵本や紙芝居、保育者の育ちについて研究。編著書に「エッソードから楽しく学ぼう環境指導法」(創成社)など。



なかやみわ／さく・え

「ねべ、並べせ、並べば、並い」をかけぱいいの。」クレヨンの「べべべべの間じかに」。ほかのクレヨンたちは静かで寂寂あります。」「べべんば、ま」「あつてるよ」「あれ?」かいたえをくわべられたから、たまらなさよ……」子供たちの遊びの世界は意外とシリアスだね。「ふれい」とじつも、じぐもなく「ダメ」と断られたのも珍しまつません。わが子ダメにはダメの理由があり、それぞれが自分のことわざやイメージをもって遊んでいるからなのですが、勇気をだして声をかけたのに断られるのは、やせつゝらしくです。まじいやくわくんのゆきに始まりました……。「なんで、ぼくつて、こんな、じょなんだわう……？」みんなが楽しそうにお絵かきするのを見ながら、一人膝を抱えて悩むべく人の姿に胸が痛みます。

なかやさんの作品でじつも感じるのは、キャラクター造形の巧みさです。黒のクレヨンが、確かにクレヨンの中の花形ではありません。外のもの凧の私も、好きだったのは「シルクのクレヨン」。黒はぶらりかひごわんと、あまり使わない色でした。自信なだけで、わよりとおひねじて、素直で優しくいくくんは、あれ!」私の知っている黒のクレヨンそのもの。

黒のクレヨンが動き出したら、べべべんのような子だろうと納得してしまいます。「わうつ、しんびんの、まあなんて、もういやだよ」と、最初に箱を飛び出るのは、やっぱり元気でやんちゃなきらりくん。べべべん「アーバイスをしてくれるシャープペンのお」じさんや、その光沢のあるスマートな姿は、穎やかで賢明な性格にぴったりです。それぞれ個性

的なキャラクターたががむくむくと腰手に動きなして、物語を紡いたかのような自由で伸びやかな品世界が魅力です。べべべんたかの体は色紙で作り、背景を描いた後に貼りこんでいるとのこと。クレヨンたちが生き生きとみえるのも、じつした細やかな配慮に「ほれられてこゆかねじょひ。べべのねわる表情からも心の動きが伝わってきます。子供もたれにとつても、仲間にじれてもらえないといふことや、描くのに夢中になりすぎてケンカになってしまふクレヨンたちの姿は他人事には思えなくなります。

そして、この作品のもう一つの醍醐味は、黒一色に塗つづらされた画面から、見開き一面に色鮮やかな花火が出現する場面。ページをめくったときの子どもたちが驚く顔が、読み手にとつてはやみつきになります。子供もたかも、どうなる」とかと不安げに見守つてじたのでしょうか。「べべん、さつきは「ねんよ」「べべつて、わいこね」ほかのクレヨンたちからの賞讃の言葉は、思わずほいほいです。一人一人が大切な存在であることが、すんなり心に染みついてきます。

子どもたちにとって、身近な存在であるクレヨンたちが繰り広げる物語。絵本を見た後、お絵かきをしたくなる子供もが多いのもうなづけます。クレヨンで絵を書きながら物語の続きを紡いでいるのを感じます。

わい、今年新たに「べべべんわくわくのべん」がシリーズに仲間入りしました。一緒にじぶんも成長していくようですね。べべべんのお兄さんたちも、ぜひ楽しんでいただけたら幸いです。